義

佐野乃渡雪の八つ橋

貳編

葛飛春水著
橋幡樓國麿画

一圓齋画

癸丑新板

両国

へ13
3745
2

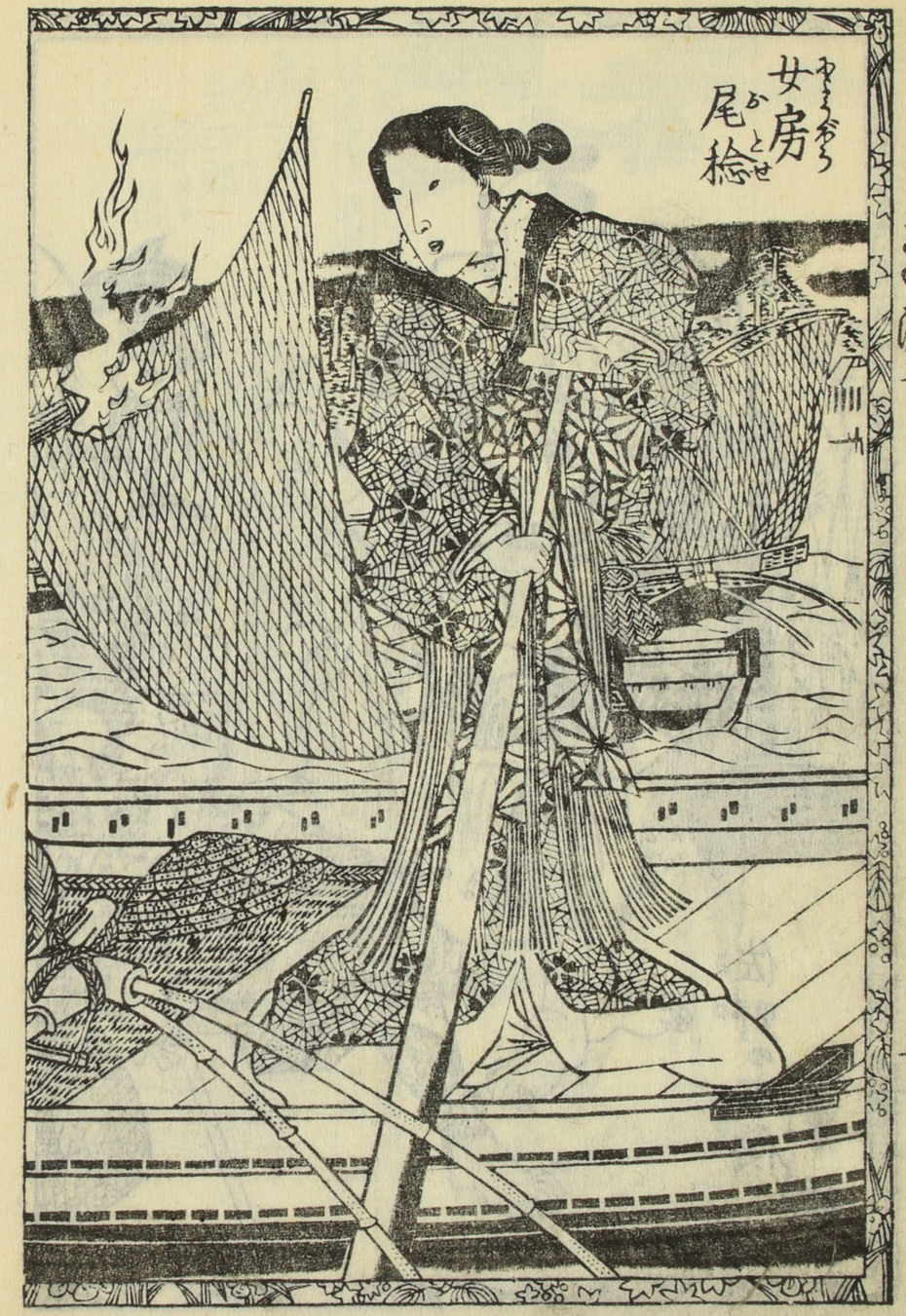
金ゞ敵の世の中と云半兵衛ゞ身の迫より浮世を観せし金言あれど地獄の沙汰も金次第と堪忍五両の相場と上て七両二分の首代出せば密合せし余もはるゞれ荒く麻の垣生の小家も金次第出まれば阿房宮酒池肉林を取の字食山瓦と抜出る驕のあるも黄金の光恩結の神も出雲下る佐渡小利益のある世の中へ賜ゞ貨殖史同も及ぶ公ば敵ゆあらぶれく金こそ自己ゞ味方ゝ素と稗史小説へ勧微心を宗とまるれど巧みれば天に絶ゞ開祖をゝ仏ゞ祭ゝ史或へ金を敵とし〻金故一期と過つあれば或へ金を味方とし〻そゞ一身を立るゝ至る開へ只是非の二ツゆゝ貪るゝ敵とあり天授を受ゝ味方とる善悪用捨の方便史。譲てのそれを得る教を婦幼示さんとする作者ゞ微意とも言ゞ言へる。

癸丑孟春新鐫

烏永一号

柳廼門主敬史誌

門 へ13
3345
赤


女房
尾稔

石濱の
漁夫
忠助

初へんのつゞき

さそもちえざへ
ものつらんと立そく夜、まちを
かけてゆくげども二十里
あまりのみちをれば、その
つぎの日もこちうふ日ひれ
たる初夜ちゝちくるひ
ところ 辯我がづきまれで
きこりしうへてよろ
あとへへやどちと
とまをのりめ
をゆとをすり
ものしも
かえふ
まげ
ずし
やぶ
より
まち
ゆき
ゆる
ゆう
九郎

抜

▣ 井そやくとうこそ、よけれとふこりハ
立ものかごのそとようひとつきふさて
ものさんとまるところをころきう
たるちえざやあくまめあり上ゆる
よりもかのかごつゞをかきひく元
のりめくゝ戸をけそるーと紙ぞんと
まるをひぞろ えゞこゆまそんゞ
ぬトひのまもゆく

▲かさふかゝて
きりつゞるを
たりゆてうこと
うけこもれば
右ようかゝる
ゆう九郎が
かごつゞ
をうゞ
うんと
ゆゞんの
ゆとふ

◀ ゆを
かけてひく
をちゝう
ふたちでる

千

栗

▣ ひそゝえ
ものつらも見つれて
かごのせをゞふあゝ
れひぞまりゝが
ものーちあう
ちんをやあふ
ちゝーとうち
をとせゞをもゞとハ
あゝとだゝりふ
かゞゝち
まそゝく ▣

ちえざ
ふちを
あゝてふ
とこも
せゞまゞ
たゝふ
そゝーも

あれかの石
ゞだゝうのかげより
まそゝちをうかゞゝ
ひんのまゝんまの
やゝふあゝちもちー
ゆそゝうゝるひーや

くの
つゞき

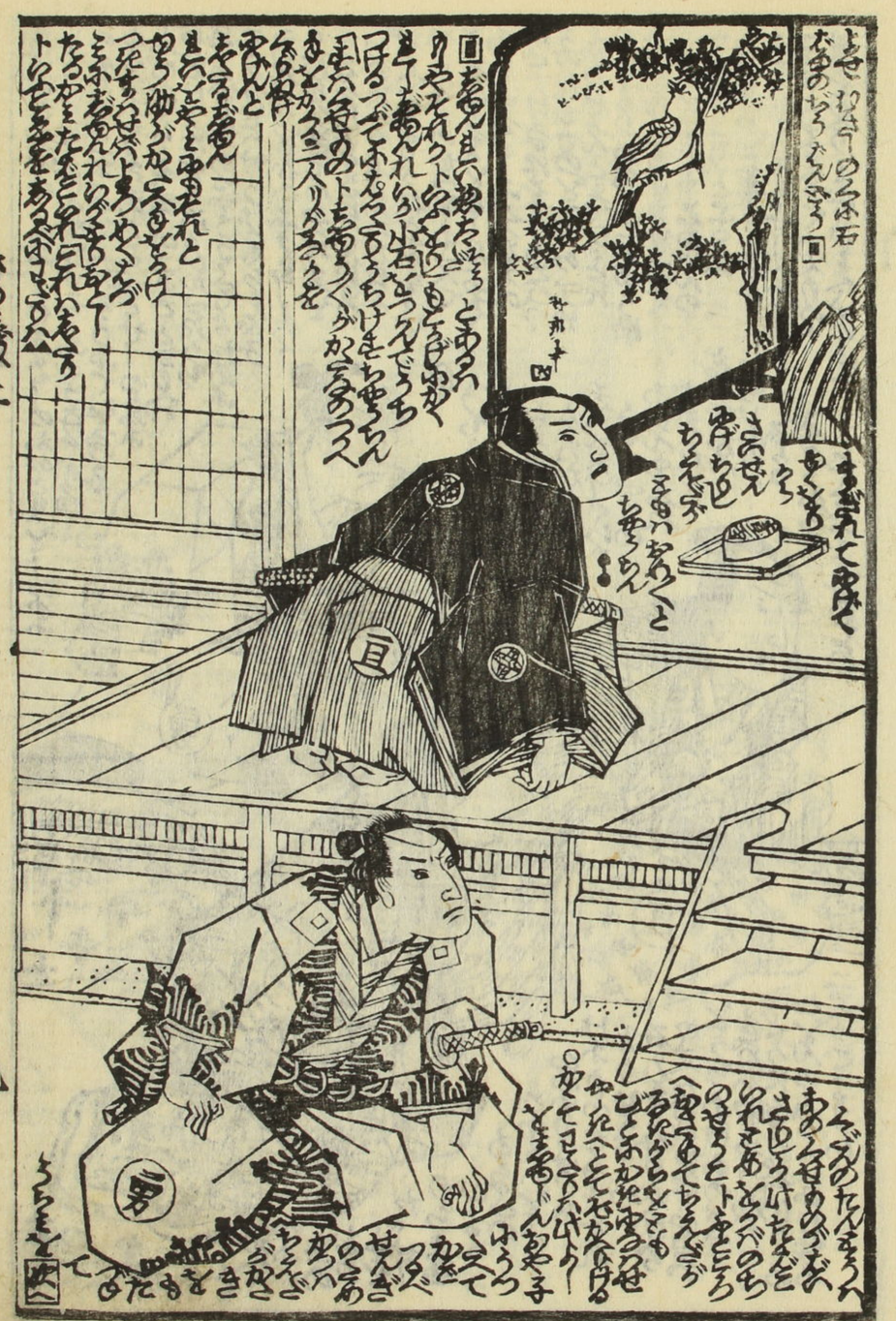
栗
赤

物

千

勇
亘

勇
旦
惣



尾
忠

勇
且

佐野の渡雪乃橋

二篇ノ上

癸丑ノ春

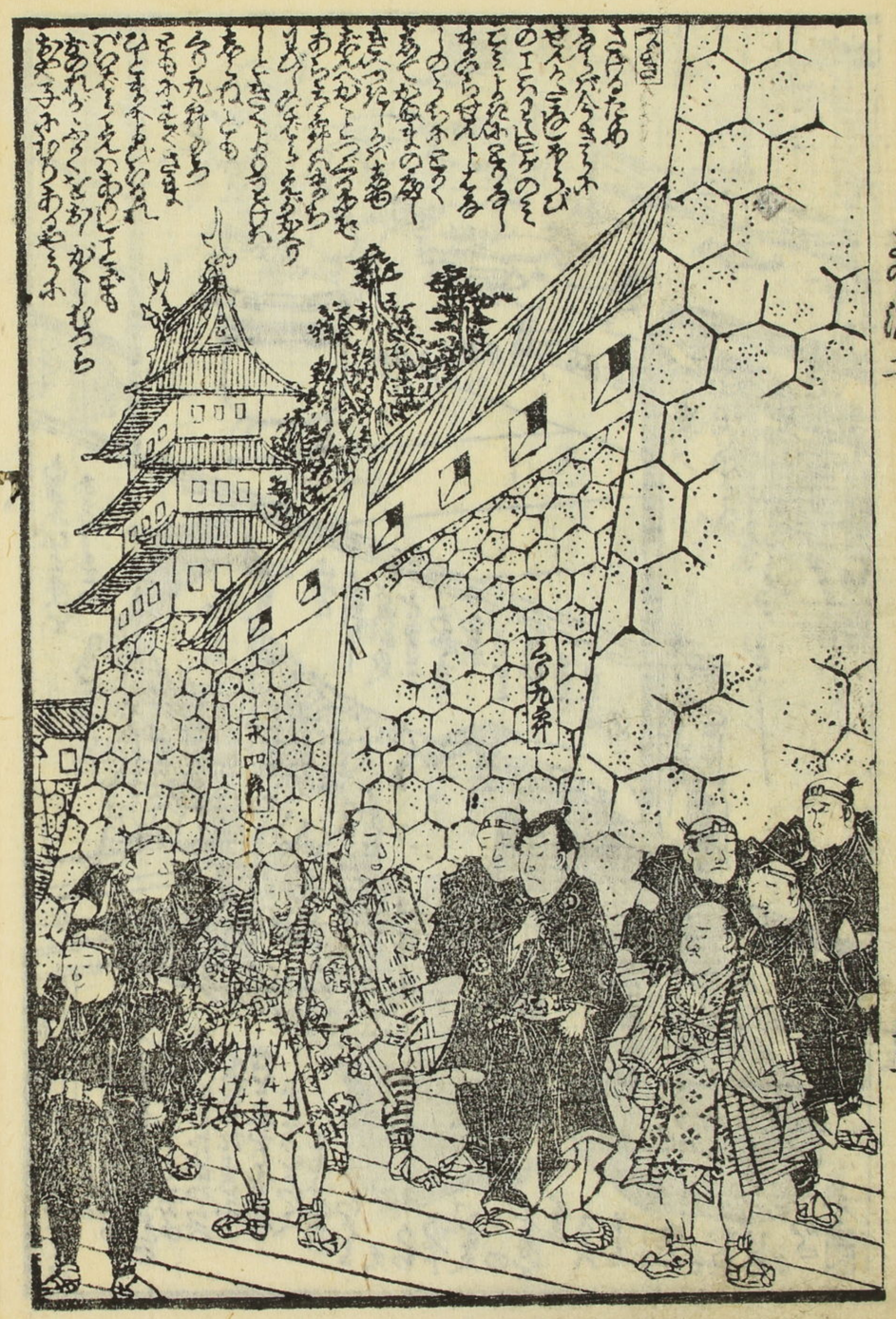
東都両國吉川町
大黒屋平吉板

東永著
國麿画

春水作
國麿画
二編上
佐野乃渡
雪ゆきの八つ橋
二編下
大平板

福
三
松
栗
茨

その
住吉乃
癸丑春
雪ゆき
ハつ
二編下
春水著
東都
国麿画
杉素書梓
門人
於二亥


永四郎
ろう九郎

十四五人のくてことあり　これむさしの
かえるのむすめ　ひるづるそうそひされやう
ひいこそふとうスートやられてよろとうに弁い
そう九弁とうもつれ　ちこそこぶもとちこ
ひるつあるえくさもうくまちうぎ者ちうけ
○かえてまくさむうらのせうにいらえぎう
うえまてとのとちかうたく
このあらんとかをうぬ月の
ちうーあうねバうづるこあ
とまあこの助のうんえ
ちのそうこうこひと
日もえちくちく
らんとえの
吉日を
ちうむ
つけてうぐ
とあるりけうふ
今ろうり月のまえ
ろうとこバ世のエうぎ
ふちうぎんとえハ正五九ふ
あるる月をえんりんむしろ
ひんご来月いかえう月ゆえこれも
まうまうちうちうもそふかひていま
ちんようせんひうをひんとあれば
ひ月の廿五日ハ吉日ろうをさうこひふ
むすめうかとでとうさうむべー
そのようにいうをようのうさーゴふ

野

東
雪
不

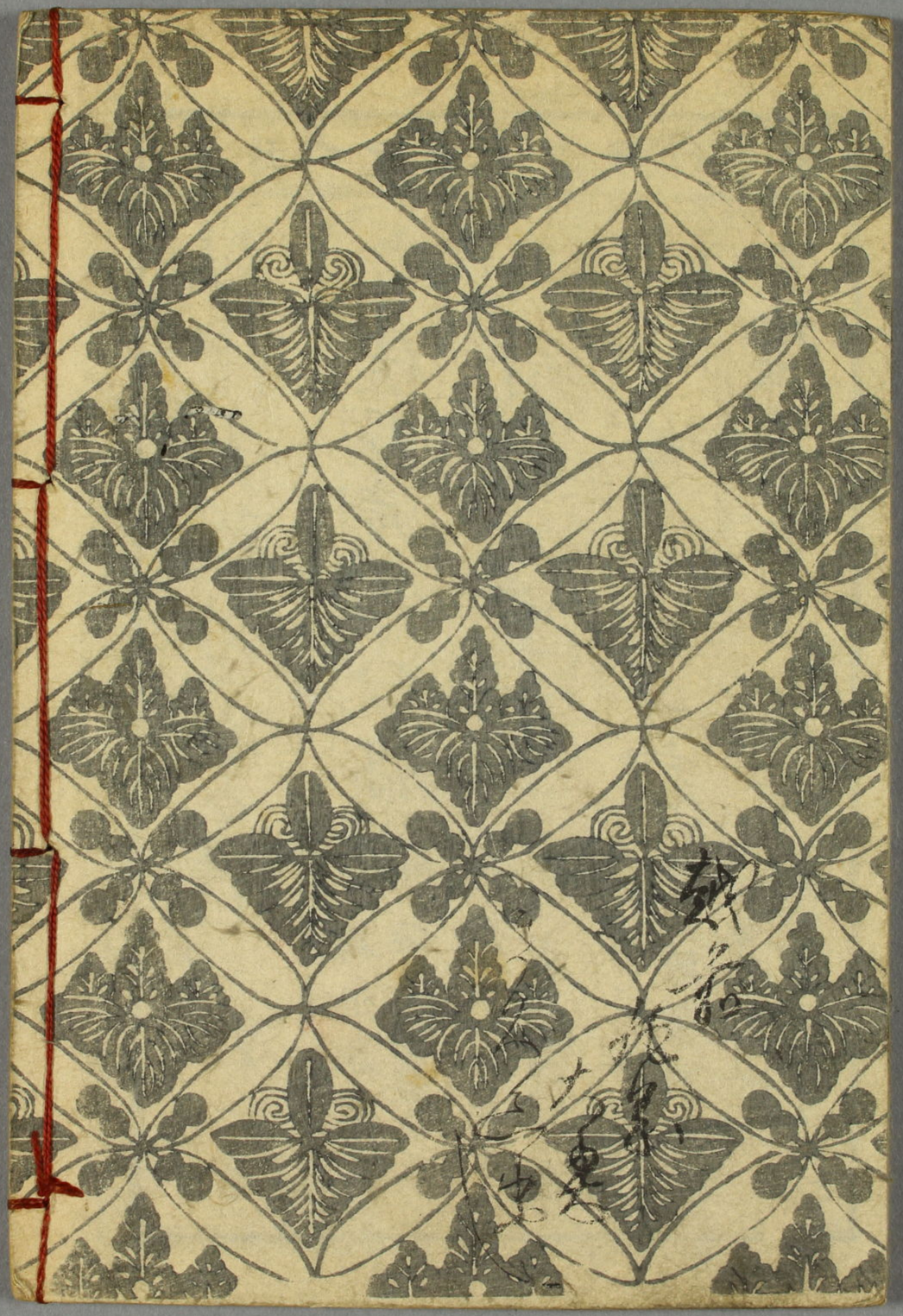
栗
雪

安政六己未孟春發行目録

弘化大雜書万々暦 大本 全一冊

佐野渡雪八ツ橋 七編 八編 爲永春水作 梅蝶樓國貞画

昔語室辟太郎 五編 六編 七編 爲永春水作 一壽齋國貞画

愛娘出世太平記 三編 四編 爲永春水作 一曜齋國郷画

地本草紙問屋 松壽堂 東都両國吉川町 大黒屋平吉板